
異世界でお医者さん目指します。

ヤマタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でお医者さん目指します。

【Nコード】

N8859Y

【作者名】

ヤマタカ

【あらすじ】

病で死に、次に転生した先は魔法とファンタジーの世界だった。前世での記憶があるアルトは、その知識を生かしながら前世で自分を死に追いやったそれと唯一闘える職業、『医者』を目指す。

けれど、彼の周りには天才画家や鬱病気味の騎士嬢など、奇怪で変人な連中ばかり。しばしば騒動に巻き込まれたりドタバタしたりはするものの、ほのぼのとマイペースに医者への道を歩んでいく、ほんわか異世界物語。

お医者さん目指します

急性硬膜下血腫。

頭蓋骨の内側で脳を包んでいる硬膜と、脳の間に出血がたまって血腫になったもの。

何かよくわからないが、そんな病気で俺の生涯は幕を閉じた。高校三年の秋だった。病気でぶっ倒れた時は「ああ何でこんなことにと散々悔やみ泣き絶望し……。色々あったものの、いざ死ぬ直前となれば「いい人生だった」と年甲斐もなく悟ったものだ。

そんな、前世だった。

転生……といえは聞こえはいいが簡潔に言えば来世。俺はまったく違った世界で生まれた。

そこはよくゲームで遊んでいたファタソジニアな世界で、魔法や騎士、ヨーロッパ顔負けの幻想的なもの。城壁が都市をぐるりと囲み、その中で国を治める王様が民を守り、また導く。

国の名はザヴェード。

約百年前まではこの世界で大地を二分するアシュランと戦争（冷戦ともいえる）状態であったが、何人かの集団によって協定が結ばれる。たった一つの集団に？ おいおい、そんな非現実的なことあるわけないだろう。戦争を終わらせたんだぜ。十中八九、何かしらの要因があるのだろうが、それを知る方法や術は当然ながら俺にはない。

今思えばこういう疑問が当然出てくるし、その答えを知ろうとも思うのだが、結果として世界が平和になったのは事実であり、何だかそれを探るのも野暮なような気がする。特に問題もない。知リた

いとは思うが、死ぬほど切望していることでもない。そんな世界の概要を知ったのも……俺が五才の頃。

丁度、前世の記憶を取り戻した時期と同じ。

高熱を煩って、三日三晩寝込んでいると、夢の中で前世の物語が段階的に始まって……一日一章ずつの全三章構成だった。誰が作ってたんだと突っ込みたいが、まあ記憶が戻ってしまったのなら仕方ない。最初は変な夢だなと思ったけど、最後の三日目。

一気に前世での生涯全てが身体全体に入ってきた感覚になった。上手く表現できないんだけど、寝ている自分の中に光る粒子がフワアアと流れゆくもの。そうして、前世での記憶がはつきりとありながら、俺は今を生きることになった。

あっちの世界では悲しい最後を迎えていたが、こっちの世界ではそんなへまはしない。

何故かって？ そりゃ〜ね。

自分、お医者さん（予定）です。

王都ザヴェードの中にある一軒家、『シャーロック医院』の一人息子。

それが俺こと、アルト・シャーロックだ。仲がいい人からは「アル」なんて呼ばれてる。

記憶が戻ってから十一年。現在十六歳。

正直言えば、何度かあっちの世界でのことも想った。それは確かだ。今の生活からしてみればそれはもう凄くて、超技術にして未来的だ。ネットで毎日動画や海外のニュースとか見ていたあの頃を懐かしく思う時もあるさ。

けどね、けどさ。

こっちも負けてらんないぜ。ゲームの世界だけと思っていた、科学ではまず解明できないだろう『魔法』。王国騎士。西洋の景色や街並み。何百というギルド。

前世では将来設計や周りの目とか、そんなある意味息苦しいとさえ思えた毎日が、ここにはない。あるのは今この時を楽しく、刺激的に過ごすという人間たちの賑わい。そして己が野望や想いを成就させようと動く時代。

いいね、すごく。こんな世界も、あつたんだ。

だから、俺はこの世界が好きだ。あの世界を知っているからこそ、この世界が好きだ。

何より、今はやりたいことがある。目指していることがある。

俺の生涯を終わらせた病。それと戦うことが出来る唯一無二の職業。さらにはそれを目指すのにこの世界では『魔法』とかいう常識が付いてくる。それもこれも、俺の努力次第ってなもんさ。

やらないわけにはいかないさ！

さつきも述べたけど、幸いこの世界では丁度戦争がなくなった。

戦争に駆り出される心配もなく、自分のしたい道、やりたいことに一生懸命猛進できる。そういう環境が整った世の中。やるかやらないかは、自分が決める。決められる。

「いい天気だなあ」

そう言って、二階にある自分の部屋の窓を開けた。朝日が眩しく身体をつつむ。

ここ数日雨続きだったけど、どうやら今日は晴れのようにだ。天気予報がない今だから、その日その日で天候がわからないってのこの世界ならではか。

今日は現在俺が通っている医術学校は休みだから、結構のんびりできるけど、何しようか。基本的な勉強はもう終わらせているから特にすることもないんだけど……。

「アルト！ 起きてるならユナちゃんところに朝ごはん持って行ってくれー？」

「はいよー」

ああそうだ。そうだった。

自分ことだけに怠けて他が疎かになってしまった。あいつに、彼女に朝食を持って行かねば。

その子は、ザヴェード王国随一の画家にして、俺の幼馴染。どうい子かって言うと――

「アルト！ 起きてるなら返事しなさい！」

「さつきしたじゃないか!？」

ああ、もう。さつさと行けばいいんだろ。父さんとは違って母さんは短気なのだ。

すぐさま一階に降りて彼女の朝食であるパンとスープ、それにレタスを持って（あれ？ 俺のがない）家を出る。そこは城下町であり、人々の生活の場。

小さな子供たちがふざけ合いながら学校へ行く姿。馬車に乗った貴族が遠出するのかガラガラと道を下っていく姿。新聞屋であるニコルさんが自転車でパフォーマンズしながら新聞を配る姿。美味しそうなマフィンを路上で売買するおばさんの姿。

一人一人、今を生きる人々。俺も例外なく、その一員。

「わるくないね」

うちの家から道を挟んだ向かいに彼女の家は建っている。

家を出ればすぐ目の前だ。別に俺が持つていく必要はないんだけど、俺じゃないと彼女は拗ねてしまう。天才と呼ばれているのに、中身は意外と幼いのである。

馬車が通り過ぎた後、ニコルさんに手を振って、マフィンを買っているおばさんに一礼して、俺はその家の扉を開く。合鍵は常備持っているので大丈夫。……あいつが鍵閉めたことなんてないけどね。俺がいつも閉めているんです。無用心すぎるだろ。

そう思いながら、扉を開ける。これも一つの日常に過ぎない。

けれども、前世の記憶がある俺にとっては毎日がとても新鮮で、面白いもの。異世界にて、医者を目指す青年の、どこにでもある、平凡な物語――

……ま、俺以外、全員変人だけでも。

天才画家

ラテン語で絵のことを「ピクトウーラ」と言うそうだ。英語の picture の語源でもある。

前世での記憶もかなり曖昧なれど、たまに役立つときもまああるもので。何故、そんな話をこんな異世界でするのかというと、意外や意外。不思議と世界は繋がっているのかもしれない。

この世界で、「画家のことを「ピクトウー」と呼ぶそうだ。正直驚いた。

んで、ある少女のことを敬意を表して“ピクトウ・レックス——画家の王”と総称している。誰のことか。決まっている。うちの向かい側にデデンと建っている家に、一人で暮んでいる我らがザヴェード王国随一の天才画家。

ユナ・L・サルジェリアである！

「起きろよ、天才」

「……あー」

埋もれている。正確に言えば下敷きになっている。

キャンパスに絵の具、模造紙にバケツ。色紙と水彩用紙に、筆に折りたたみ椅子。スケッチブックに帽子にバッグに水入れに水筆に布切れに固形絵具に本に辞書にコップに皿におやつにパンにスカーフトにダウンにランプに……あれこれ他多数。

ここ一週間、俺は医術学校の専門試験の最中であつたため、朝と夜（昼は食べない主義らしい）は彼女の家の扉を開けてすぐ下に食事を置き、そのまま全力疾走で学校に行っていた。母さんがいつもそれを回収するのだが、昨日から何故か食べた形跡がなかったらしい。

食べなかったのではなく、食べれなかったのだ。

「いつも通り、ここに朝食置いてさっさと帰ってもいいんだが？」

「あー。あー。あー。……あ？ おお？ その声はもしかしてアーちゃん？」

「もしかしくなくても、そうですが」

「おおお！ アーちゃん、アーちゃん！ 助けて、今にも死にそうなんだよお！」

「一日何にも食わずに生きてるんだ。別に助けなくても大丈夫ですよ」

「うん、まあそうなんだけどね。別にこのまま一人で死んでも特に問題ないかなあと思っただけだね。でもね、でもさ。今ボクの近くにいるのがアーちゃんなら話は別だよ。ボクが世界で一番側にいたいアーちゃんがいるのなら話は別さ。ああ、アーちゃん。今ボクはすぐここから抜け出したいよ。迅速に的確に今すぐここから飛び出したいよ。でもね、でもさ、アーちゃん。えとね、何故かボク、抜け出せないんだ。何でだろう？」

とても一日中飲まず食わずの女の子のテンションとは思えないほど、彼女の口は元気だった。

まあこれだけ体力や気力があるのなら、あと数日はもつのだろうが、ここで俺が帰ってその反動で自殺されても困るので、やれやれとばかりに埋もれている彼女を救助する活動を始めた。

ついでに、一週間ぶりに部屋の掃除と床拭きもかねて。

余談だが、救助中も彼女の口は引つ切り無しに話していた。

「やほやほ、元気だったアーちゃん？ ここの一週間全然会えなかったけど」

「学校の専門試験中だったんだ。ユナの健康状態も気にはなっていたけど、まさか埋もれているとは思わなかったよ」

「うん。ボクも埋もれちゃうとは思わなかったよ。ふと食べ物に絵を加えたらどういふ作品になるのかなあ、なんて思ってたらいつの間にか埋もれちゃってて。困ったね」

「俺はお前の思考に困ってるよ。何だ食べ物に色加えるって……。あとさ、いい加減」

「ん？」

「『それ』止めないか？」

「嫌。じゅーでんちゅー」

現在、目下。

ユナは俺に抱きついている。抱き憑いている。駄き付いている。彼女の紹介については、もう特にする必要はないだろうか。たった今お送りした一連の流れで充分であろう。ユナ・Ｌ・サルジェリア。ザヴェード王国随一の天才画家なのだが、中身はかなり変わっている。同じ十六歳とは到底思えないほどの人格者である。

（本人が長いと邪魔という理由で）髪はショート。色はエメラルドで、瞳も同じだ。

画家ということもあり、服装には常に絵の具やらペンキやらがべったりくっ付いており、逆に可憐なドレスやワンピースを着ている姿はまず見たことがない。最後に見たのは、四才ぐらいの時か。

彼女は、一人暮らしである。

理由としては、この世界ではよくある話で両親が出稼ぎしている最中に崖から転落死したというもの。盗賊や野犬に襲われなかっただけマシなのかもしれないが、五才の誕生日を間近に控えた彼女にとって、その事実が衝撃的なものであった。両親の死を聞かされた瞬間、ユナは卒倒し意識不明に陥る。そして、二ヶ月後奇跡的に目を覚まし、一心不乱に絵を描きたいと言い出して、初めて描いた作

品が……。

現在、ザヴォード城の大広間の中央に飾られている。

タイトルは、『ノウス』。意味は『今』。

光と闇を半々に分け、見る人によつてはどちらにでも解釈できる至高の一品。描いた彼女に実際はどちらなんだと聞くと、彼女はどちらでもないと答えた。これにより、ますます『ノウス』に対する画家たちの議論は過熱していく。

だが、実際は彼女にとって本当はどちらでもない。というものはなく、どうでもいいが正解なのだ。

ユナは自分が描いた作品が完成すると、それは意味がなくなったと解釈し、過去の遺物として処理する。ゆえに、その作品がどうなるかと、どうあるかと、どう見られようと、特に興味はない。

そして付け足して言えば、『ノウス』が現しているのは光でも闇でもなく、悲しみである。それに気付けない自称お偉い評論家たちは全員阿呆だと思う。ユナだって一人の女の子。それを考えれば答えは一つしかないだろうに。

「アーちゃん……」

「あ、ごめん。怒った顔してた？」

「うんにー。そういう顔も好きだからいいよー」

そうして、彼女の身柄はユナの両親の親友であった俺の両親が引き取ることになったのだが、噂になった『ノウス』を国が買い取ると言い出して、莫大な賞金が彼女に手渡されたため、現在彼女は一人で何不自由なく暮らしている。

が、やはり。金があっても動こうとはしないので、こつやって生活に関する面倒はうちが見ているのだが。メイドでも雇えばはるか

にいいだろうに。

と、いうわけで彼女についての概要は以上である。

まだまだ説明、補足したいところもままあるが、それはゆっくりと付け加えていきたい。

なにはともあれ、彼女が俺の周りにいる変人が一人。

天才画家こと、ユナ・L・サルジェリアである。

「えっちいこと、しよ?」

「却下だ」

変人だ。

騎士のお嬢さん

「それで？ 新しい作品はいつ描くんだ？」

「うんにー、もう終わってるよ。いつでも処理して大丈夫い」

「処理って……。相変わらず完成したものには興味なくなるんだな」

「そだねー。ボクが興味があるのは幾千幾万・古今東西・世界壮大
いえど、アーちゃんだけだよー」

「あっそう」

彼女が言う『処理』とは、好きに持ち出してくれて構わないという意味だ。

ユナはその性格からか、基本描きたい時に描いて、描きたくない時はまったく筆をとらない。それゆえザヴェード中から作品依頼が殺到するのだが、その作品はおおよそが数ヶ月に一回開かれる王国の舞踏会で出品される。

彼女の絵画を欲しがる連中は、そこで自らの金を出費して買い取るしか方法がない。

さらに言えば、その懸賞金はユナの意志で全て孤児院に寄付されている。「お金なんて、死なない程度であればそれで充分ー」とのこと。

そんな粋な計らいをする天才画家と、現在俺は道を歩いている。たまには外に出ないと、この万年ぐうたら女は永遠に外出なんていう高等技術をやらないだろう。変人とは、かくも自由な人間なのだと思う。

「あら、ユナちゃんじゃない！」

「おはよーマグちゃん。元気ー？」

「おかげさまで元気よ。たまにはうちのパン食べに来なさいね」
「はい」

数分後。

「おお、ユナ嬢じゃないか！ 今日はおー坊と一緒に！」

「そだよーグリちゃんー。デートなんだ」

「がっはっは！ そりゃあ何よりだ。しっかりとエスコートしろよ
！」

「任せろい」

「おいこら」

ユナは基本知人や友人に対してちゃん付けで呼ぶことが多い。そのちゃん付けには年齢、階級一切問わずで定期的にやって来る国のお偉いさんにも適用される。確か、マーデラさんだったか。事務の仕事バリバリこなす貴族生まれのキャリアであるが、ユナの前では等しく『マーちゃん』である。

最初言われた時は赤面してたなあ。懐かしい。

今はもうすっかり仲良くなって、わざわざ食事に来るぐらいだ。

貴族といってもそれは人それぞれのようである。彼女のおかげでヴェードの治安や内政について聞くことができるし、庶民の俺には貴重な情報提供してくれる素晴らしい人である。

まあ、その代わりにユナの絵画の保管を責任もってやっているけど。

「それで、アーちゃん。ボクたち今どこに向かっているの？」

「シェリーのところ」

「シェーちゃん？ ……いつものやつ？」

「正解」

ふむ、と珍しく考え事をするユナ。ちなみにユナとはこの世界では『月』を意味する。

確かラテン語で月はルナだったな。やっぱどこか似ている。不思議なものだ。もしかしたら神様ってやつは結構適当なやつなのかもしれない。そりゃあ千差万別の世界をほいほい作れないよなあ……。月と言っても、二つあるんだけどね。この世界では。一つは綺麗な金色だけど、もう一つはブルーサファイア風の色なんだ。すっごい綺麗で、前世の記憶が戻った際に改めて見た時は思わず涙を流してしまったよ。

ああ、しかし。どうやらそんな感傷に浸っている暇はなくなってきたようだ。

到着、である。仕方ないとはいえ、友達だし、俺一応医者のお卵だし、放っておくわけにもいかないし。扉をノックする前に、改めて身だしなみを整えて、深呼吸。それを見ていたユナも真似するように大きく深呼吸……。おい、むせるな。はいお茶。

さつと。そいじゃ、一つ。

コンコン――

「はい、ただいまー」

「どうも。アルト・シャーロックです」

「あ、アルトくんね。少々お待ちくださいませ」

そう言って、数秒後扉が開かれた。開いてくれたのはこの屋敷でメイドをしているルビーさん。面倒見がよくて、世話好き。確かもうすぐ結婚するとかで人生最高潮のお人だ。

言い忘れていたが、今俺とユナの前にある開けてもらった扉は超でかい。お屋敷の扉だ。ちょうど貴族街と庶民街の中間付近に建て

られたその家は、由緒正しき騎士の名門。一応貴族なれど、代々貴族と庶民の仲介役としてもその任を受けている。

貴族の家は普通、噴水や庭が豪華に並ぶものだが、この家にそういうものはない。何故か畑はあるが。『彼女』の祖父の趣味らしい。噴水や庭がないのは俺たち庶民を考えてのことで、その反面、家が絢爛な屋敷なのは貴族を考えてのこと。なんとも中途半端と見られるかもしれないが、同時にそれは中間・中立を象徴しているともとれる。

彼女の家は、それなのだ。

名誉あり、誇りあり、人格高し。長い歴史の中でザヴェードを支えてきた王国直属騎士の家柄。生まれた時よりザヴェードに忠誠を誓い、生涯国と共に歩む道。まさに騎士道。

戦争がなくなった今でも、内乱や内戦の可能性は十二分にあり、当然彼らは必要である。

ザヴェードが誇りし名門騎士――

ウインゼル家である！

「死にたい……」

「何やってんだよ騎士様」

補足、変人その2である。

変態看板娘

シェリー・ウィンゼル。

黒髪のポニーテールが特徴の女の子。歳は俺の一つ下である。

やや釣り目でシャープな顔立ち。耳には母親から騎士学校入学にプレゼントされた白馬のイヤリングを付けている。足は細くその美しい脚線美は一部のマニアどもから女神扱いされてたり。どの世界でも需要はあるようだ。

騎士の名門、ウィンゼル家の次期当主……の予定。彼女が生まれた後に、シェリーの母親が流行り病にかかり、子供が生まれない体質となってしまった。妻を愛している夫は再婚や他の嫁を迎えることなくシェリーを次代の跡継ぎにすることを決定した。

そんな父親を彼女は大変尊敬している。

ゆえに、全四回生のザヴェード騎士学校でまだ一年生であるが、その実力は既に噂となって広まっているほどだ。普段から凜とした佇まいに孤高のようなオーラを放つ彼女は騎士とは男がするものという風潮を根底から揺るがす逸材になると、何気に多くの方々から期待されている。

そんな、彼女だ。

外見は、それだ。

「ああもう嫌。明日も稽古、明後日も稽古、明々後日も稽古……。本が読みたい、純愛の王子様風味の恋愛小説が読みたいよお。もうやだ、一生寝ていたい。夢の世界ですうつつと寝ていたい。……何かこの願望を叶える方法は……。そうだ、死のう」

「死ぬなアホ」

「おはよーシェーちゃん」

「え？」

ぶつぶつ言っている彼女の後ろから突っ込みを入れる俺と、朝の挨拶をするユナ。

そんな俺たちに気付いていなかったのか、ベッドの上で小さく丸くなっている彼女はふと後ろを振り向いた。やや涙目のその表情は、危ないおじさんが見ればお持ち帰りしたくなること自明の理なり。

数秒固まった後、大声で叫びながらズザアアア……と後退していくシェリー。その速さたるや、風の如し……ってなんださっきからこの古風な言い回し。やめよう。けれど、そう比喻してしまいたくなるほど彼女の後退はマジで速かった。

「どどど、どうしてここに!？」

「うつ病患者の容態を見に、ね」

「シェーちゃん、まだその癖治ってないの？」

「ここ、これは治るとかそういう問題じゃないの! 私の半身みたいな感じで!」

「ねえよ。ほら、さつさと支度しろ。“ラズウール”に行くぞ」

「えええええ!?! や、やだ。今日は家でずっと引き籠もるんだ」

「却下」「」

ベッドにへばり付くシェリーを遅れてやって来たメイドのルビーさんと一緒にどうか『分離』させ、そのまま俺は部屋を出て、文句や現実逃避をしまくる彼女を無視してユナとルビーさんで服を着させていく。扉越しでもわかる、彼女の小声なる恨み言はいつもながら可哀そうであり、可愛くもある。

シェリーは見た目とは反対的で、大変繊細なのだ。

そりゃあもちろん、女の子だから仕方ないとも言えるのだが、家

柄が家柄だ。名誉ある騎士の人間がうつて品質の女の子と知られれば積み上げてきたウィンゼルの名に傷がつく。彼女もそれぐらいわかつてる。ゆえに年齢を重ねるうちに、彼女の中で外なるシェリーと内なるシェリーが構築されていった。

現在では、外出をすれば自然と外なるシェリーが出て、騎士のイメージたる凛とした美しい女性へと変身する。そして家に帰れば恋愛小説大好き子のうつ病シェリーへと戻るのだ。

どっちも彼女で、どちらも彼女の正体だ。

環境がそうしてしまったこともあり、簡単には治せない。そしてそれを見ているしかなかった自分自身が情けない。無理に治すと十中八九悪化するだろう。以前、そのことに真剣に悩んでいると、彼女はこう言った。

「無理に治したくありません。いえ、むしろ、これは私が求めた結果なのです。だから落ち込まないで、アルト。あなたが側にいるだけでも私にとっては充分すぎるほどの幸せなのです」

その時の顔、その場にいた家と外との間にある玄関。

果たして、あの時の彼女は一体『どちら』だったのか。話し方は外でのシェリーだったが、顔は内にいる時のシェリーだった。同時に、その言葉を聞いた俺もどんな顔をしていたのだろう。

これでいいのだろうか。

これでいいのか。

疑問と悩みが尽きることはない。

「それで、どこに行くのだ？ アルト」

「さっきも言っただろ。“ラズウール”だよ」

「ほお。あそこの雰囲気は騒がしくも活気があって好きだ。『ファラ』もいる」

「フアーヤン、今日も元気かなー」

「時たま『ちゃん』以外も使うよな、お前」

一度外に出ればキリツとした外出バージョンのシェリーへと早変わり。

歩いていれば当然のように頭を下げて来る者、話しかけてくる者も多い。まあ、天才画家と名門騎士が横にいるのだ。目立たない方がおかしい。

最近の騎士学校や医術学校、ついでに絵画うんぬんの談笑をしながら俺たちは三人である場所に向かう。そこはいつも俺たちが集まる時に使う場所。小さい頃からの思いでもあり、なんだか第二の我が家っぽくも感じる場所。

冒険者やギルドの連中、観光人に流浪人などありとあらゆる人たちがあつまる食事の会合。料理を扱う所であり、情報が集まる所でもある、出会いがある所ともいえる。

ザヴェード市民街の中でもひとときわ有名で活気がある酒場。飲み物・食べ物なんでもござれの……。

大型飲食店、“ラズウール”である。

「あら？ ようこそなのーよ」

「よ、フアラ」

「フアーヤン、お久し〜」

「失礼する」

店の扉を開ければそこは千差万別・多種多様な音が聞こえてくる。ガチャガチャと、ガヤガヤと。フォークやスプーンなる金属音が鳴る音に、人と人との愉快的笑い声・ひそひそ声・泣き声、歩く走る進む音、食器の衝突音、店員同士の……といっても、店員はこの店を経営している一家の人間だけだが。

その一人が、目の前にいる。燃えるような赤髪が、彼女の存在を引き立たせる。名を――

「BLにはもう目覚めた？」

「ねえよ」

ファラ・コルケット。

変人その3

BL好きでレズ。もちろん異性にも興味あり。かなりの変態。変態用語や卑猥な言葉を平気で使う、ラズウル看板娘である。この世界で男同士のあれなことを『ファビアン』というらしいが、俺がついBLという単語を口走ってしまい、何故かその言葉をとても気に入ったファラが使い始めた。

現在、ここラズウルにおいてその単語が凄まじく広まっている……どうしよう。世界にまで侵食したらどうしよう。

時刻は午前。場所はラズウル。役者がそろいつつあった。

騒動数分前

「皆が集まるなんて、二週間ぶりなのよーね」

「つておい、いいのかファラ。店の手伝いしなくて」

「いいわーよ別に。まだ朝頃だし、お客も少ないしね」

そう言つて、赤髪の彼女ことファラ・コルケットは近くにあつた椅子に座る。

ややたれ目であるが燃えるような紅蓮の髪が対照的な印象を与え
る。年齢は俺より二歳上。一応、お姉さんだ。身長も同じぐらいだ
し、おしゃべり上手で客からも人気がある。第一印象では、彼女は
かなり高ランクであろう。“ラスウール”オリジナル服を愛用して
いて、その服にはところどころ「安い！ 旨い！ 早い！」の文字
がザヴェード語で描かれている。

この三つの言葉、前世でどっかの牛井屋が売りにしていたような
気も……。ああ、気のせいだな。そうだ、そうに違いない。こんなと
ころが世界で繋がってたまるか。

ユナとシェリー。天才画家と名門騎士の二人であるが、このファ
ラ・コルケットもそこそ有名な女性だ。見た目も結構な美人だし、
人当たりも良好。さして問題はない。

ここまででは、ね。

「でさあ、アルト。やっぱり医術学校つていうと裸とか裸体とかすっ
ぱだかとか見るーの？」

「全部一緒だろ、あと見ないよ。今は医療歴史について勉強中だ」

「ちえー、つまんないの。あ、だったらさ、一緒にいる男の子でこ

うゝ変なのいない？ 上手く言えないんだけどさ、んとね、男に興味が有りそうな男！」

上手く言えないどころか、ダイレクトに伝えてくる女。そう、彼女はかなりの変態なのだ。

B L好きで、かつレス。変態用語や卑猥な言葉を朝、昼問わず平気で使う。使いまくる。第一印象が良いためか、彼女に近づこうと色々な男が寄ってくるものの、終始変態話を続かれては身がもたない。そうして、一人、また一人と去っていくのである。

「まったく、そんなんだから男が寄ってこないんだろ」

「あら失礼ーね。それでも需要はあるのーよ。それに私、料理できるし」

「ねえよ。断じてねえよ。まあ、お前の料理が美味しいのは認めるけど」

確かにファラの料理の腕は凄い。とても十代とは思えぬほどの腕前をもつ。

が、しかし。彼女は未だかつて厨房に立たせてもらったことはない。一度たりとも、ない。あるわけがない。俺がファラの料理を食べたことがあるのはプライベートの時だ。結構暇だから作ったとか言ってもらった野菜炒めが信じられないほど美味かったのを覚えている。

それでも、料理の腕が飛びぬけていても、彼女が料理を作らせてもらえることはない。

理由は、簡単。

「火力が、足りないのかしーら」

「あり過ぎるんだろ！ー」

“ラズウール”看板娘、もとい変態コックことファラ・コルケツト。

彼女は、『火の魔法』を扱える。

正直、扱える、どころではない。完全に手中に収めている。完璧に己が管理下・制御下に置いている。ようは天才なのだ。火の魔法の扱いに関して、彼女以上の存在を俺は知らない。彼女以上の強い魔法使いを俺は知らない。

ま、火の魔法以外に関してはまるでダメだが。というか出来ないそうだ。

が、重ねて言うが『火』関連となれば話は別。

その実力は、なんと“ザヴェード魔法統括機関”からお呼びがかかるほど。

下級・中級・上級・特級レベルを全てそしらぬ顔で発動させるフアラ。ゆえに彼女の存在は二つの意味で有名なのだ。変態看板娘ということと、魔法使いということ。

さらに俺は知っている。彼女が、それだけではないことを。世間に知られれば大賢者クラスに抜擢されるであろう【古代魔法】さえも彼女は扱えることを……。もちろん、火の魔法限定で。

一度だけ、小さい頃にユナとシェリーと俺を連れてちよつと遠出をして超巨大な湖がある場所へ彼女は行った。「とつてもすごい魔法見せてあげる！」とかなんとか言つて。まだ幼かった俺たちにとつて、それはそれで興味津々だった。火の魔法の扱いに関しては、彼女は天才なのだ。

そして見る。目撃する。

同時に逃亡する。後悔する。

湖が、おそらく前世における琵琶湖並みに匹敵していただろう湖が、蒸発した。

否、蒸発は途中に過ぎない。
消えたのだ。跡形もなく、塵一つなく。

古代炎術魔法『メテオ』。

悲しくも、前世でゲームをしていた俺は知っていた。もう、この魔法に関しては名前まで一緒だったのだ。本当、どうなってるんだと突っ込みたい。

炎を纏いし天の弾丸、隕石。

湖の端っこにいたから。それから全力で逃げていたから。咄嗟にユナがかなり強力な防壁魔法を発動したから。地形的になんとかなかったから。おそらく、要因は多々あるだろうが、俺たちは生き延びた。もちろん、その次の日はザヴェード中で大ニュースだ。多分、もう一つの大国アシシランでもこのニュースは知られただろう。

どこの誰が、一体何の目的で。

憶測が憶測を呼び、再び戦争でも始まるのかと世間は大いに騒いだが。結果としてそれから何も起こらなかった。当然だ。二度と使わないと、俺が誓わせたから。多少彼女も反省していたし。多少、ね。

そんなとんでも女性であるファラであるが、見た目は綺麗なお嬢さん。

現在、絶賛彼氏募集中だそうで。

「何かエロイ話ないーの？」

「ねえよ」

「アーちゃん。えつちいことしないの？」

「しねえよ」

「アルト。ミルクあるか？」

「頼めばいいだろ！」

そんな、慌しくも変人な三人に囲まれる俺。

女だらけだと？ おいおい、『一応』女だけで中身は変人だぞ？ 性格は幼く気まぐれ全開の画家に、二重人格のうつ病体質騎士に、変態炎術師コック。

ああ、そうだ。そうだった。

もう一人だけ、いたな。

「失礼しますわ！」

おお、噂どころか考えただけで来るとは。どんだけ登場シーンを熟知しているんだ彼女は。

どうやら、最後の変人がご登場のことで。

けれど、その説明を悠長に考えている余裕は、残念ながらなかったのであった。

「一大事ですの！」

そう言っつて、金髪の令嬢、アリス・フォン・シャーベットはやって来た。

隣に、知らない男の子を連れて。

それ即ち、数分後、一つの大波乱が巻き起こる。

タイムリミット・10分

「アリス？ 久しぶりだな、公爵家の業務は終わったのか？」

「あらアルトさん、ご機嫌麗しゅう…… って今はそんなことを言っている暇はなくてよ！」

「五月蠅いよアリ」

「ユナさん！？ 貴方もここにいらして！？」

入ってくるなり大声かつ元気に登場してきたのは、金髪の令嬢。

髪は頭から肩まではストレートで、そこから腰までは縦ロール風な髪型。碧眼で優雅な趣きは品の高さを現し、挑戦的な目つきをしながらも気品ある言葉遣いは生まれの良さを漂わす。それもそのはず、彼女はザヴェード公爵家の長女なのだ。

公爵って言うところの世界に来るまで、ほとんど聞いたことがなかった言葉であるが、簡単に言うところ国において貴族に対して血統または功勞に基づき授与または世襲により継承される等級称号のことである。ぶっちゃけ言うと、王家の次に偉い身分の方々ってこと。

んで、何でそんな超偉そうな（事実偉い）家の長女がここにいるかというと、彼女は俺、ユナ、シェリー、ファラの四人と同じ幼馴染なのだ。小さい頃はいつもつるんでた五人の中の、最後の一人である。最近は公爵家としての仕事忙しいのと、俺や皆も忙しかつたためかあまり会えなかった。けれど、こうやって久しぶりに皆会えたのは嬉しいものがあるな。

余談であるが、寂しがり屋でもある。つまり、騒がしい方が好きなタイプ。

対し、五月蠅いのが基本的に嫌いな天才画家ことユナにとっては

鬱陶しいことこの上ないらしく、この二人は小さい頃より犬猿の仲だ。といっても、口喧嘩となればユナが圧勝するのでアリスは苦手としている。前世の言葉を使うなら、『犬猿』というより『蛇と蛙』の関係だなあ。アリスを略してアリなんて呼ばれているし。全然略してない。

「ところで、今から帰るんだよね、アリ？」

「帰りませんわ！ 今来ただかりでしょう！？ で、でもよかったですわ、正直フアラさんだけでは難しいと思っていたので……」

「あら、随分と失礼ね。一体何事かしーら？」

「そ、そう！ 皆様、一大事ですの！ お力を貸してくださいまし！」

そう言つて、本当時間がないというような口調でアリスは隣にいた男の子を前に出す。

その男の子はとても綺麗な服装をしていて、見るからに貴族という印象だった。顔も（当然ながら）幼く、どこか保護欲が沸いてくる。しかしながら、当人のその子は今にも泣き出しそうだった。

焦りながらも、事態は一刻を争うという表情ながらも、可能な限り冷静にアリスは言った。

「この子は、ザヴェードの侯爵家の筆頭、ユナゲルス家の一人息子でございますの」

「ユナゲルス家って言えば、確か今の当主がかなりの時間に厳しい人で有名な一家か？」

「正解ですわ」

一応、説明しておく『侯爵』は日本でいう大名クラスの爵位だ。数が少ない公爵家と違ってばちばちの数であるが、それでも権力は大きいあり、家柄によって色が異なる。

その中でも、ユナゲルス家といえば『精密時計』と称されるほど時間に厳格な一族として知られている。庶民の俺でさえ知っているのだから相当だ。なれど、その厳格さは政治にも反映されており、彼ら一族が主導で決めた政策は、あつという間に国民に反映されるのだ。その速さからも、精密時計という二つ名がくる由来となっている。

ゆえに、彼らは時間に厳しい。厳しいどころではない、絶対だ。だから、例えそれが愛息子の事情であっても、変わりない。

「その子がどうしたってんだ？ 今にも泣きそうだが？」

「このたび、ユナゲルス家の現当主の方がアシュランへ赴任することになりましたの」

「へえ……アシュランにか。そりゃあ大仕事だな」

この世界を二分する大国、ザヴェードとアシュラン。

約百年前までは大戦争間近というところまで来たのだが、どういふわけか、無期限協定を結び戦争が終結した。当然、今まで戦争しかすることがなかった世界だ。皆、次に何をすればいいのか途方にくれたのである。

前世の俺からすれば、まるで戦後の日本という感じでなんとも共感するところがある。

あの頃は、次に日本が目を向けた先は『経済の発展』だった。目標を立てた日本の猛攻は凄まじく、あれよあれよと突き進んでいったものだ。けれど、この世界の住人にその発想はない。誰が経済を活発化させようなどと考えるか。けれどそういう人間が、いつか王家から又は貴族から出るといいな。そうなれば世界も随分と変わっていくだろう。

もちろん、この国の政治家も十人十色。

だりくりくりと貴族ライフにどっぷり浸かる連中もいれば、積極的に国を動かそうと行動する連中もいる。ユナゲルス家は後者である。その一環として、かつての敵大国アシュランへ遠征に行くようだ。

……ん？ 遠征？

でも、その子供が、何故、ここに？

「ユナゲルス家当主、ガイル様は奥様と一緒にアシュランへ行くと決定されましたの」

「子供は、こっちに？」

「ええ。まだあちらにこの国の子供を連れて行くのは色々大変でしょうから……。ザヴェードの人間とわかれれば、子供が苛められる可能性ありますし」

……ああ、なるほど。事情が飲み込めてきた。

まったく、相変わらず他所の騒動に首を突っ込みたがる女だな。

それはお前がどうこういう問題ではないだろうに。しかし、けれど納得はできる。

子供の気持ちは完全無視だからな。この今にも泣き叫び、両親の名を心の奥底から言いたい年頃に放置という環境を与えるのだ。辛い、なんて言葉じゃ全然足りないだろう。

「で、お前はどうしたんだ。アリス」

「この子は両親が遠征と決まってから、ずっと自分の部屋に閉じこもっておりまして。でも、やっぱり最後に一度だけ、言いたいことがあると決心しまして……」

「家を飛び出したはいいものの、時間がない、と」

「ですわ」

さすが精密時計。子供が家に閉じこもろつが何しようが任務に忠

実だ。

ま、そういう貴族もいないと国は周らないしな。この子も、その決心をするのにどれだけ苦悩しただろうか。そして同時に、一体『何を言いたい』のだろうか。

聞くまでもなくもう決まってしまった事実、両親に、何を言うのか。仮にその気持ちを伝えても、事態は変わらない。この子の望みは、決して通らない。

「坊や、名前は？」

「……ロツク」

……英語で、時計。何という運命のイタズラか。

ふと気付き、辺りを見渡す。さっすが大声で騒ぎを発生させるのが上手な公爵令嬢。今俺たちの目の前にある問題は、周囲の者たちにも筒抜けだった。さっきまであればど騒がしかった店内が、今では物音一つ静まり返り、誰一人欠けることなくジツと俺たちを見ている。

皆、わかっているのだ。

貴族が嫌いな者は当然多いけれど、それでも今はそういう問題ではない。

子供が、親に会いたがっている。それだけのことに、身分など関係ない。あるわけがない。

「アリス、出発の時間と場所は？」

「十時ジャストです。場所は北門」

「ファラ、今の時間は？」

「九時五十分なのーよ」

幸いなことに、この世界でも時間帯は二十四時間だ。多分、こればかりは奇跡的に同じなのだろう。

皆が、俺を見る。って何で俺を見るんだよ。ユナもシェリーもアラモアリスも。黙してただ俺を見る。店内の客全員も俺を見る。ファラのご両親も俺を見る。時間は出発十分前。北門に走って行っても二十分はかかる。なれど、それは『走って行けば』のこと。……ちくしょう、答えは決まってるじゃないか。

恥ずかしい役回り、させてんじゃないよ。まったく。本当に、冗談じゃない。俺は医者なんだぞ、病人連れてくるならまだしも、子供の面倒まで見てられるかっての。だが、まあ……。それでも、なあ……。

悩む必要なんて、あるわけない！

「必ず送り届けるぞ！」

「うい。アーちゃん！」

「騎士の名に懸けて！」

「当たり前なのーよ！」

「言っまでもなくて！」

瞬間、店内中の客から歓声が上がる。

うわ、うぜー。こういうの待ってやがったな。朝から元気な連中だぜ。

けれど、な。悪くない気分だ。そして同時に、この五人と一緒に行動を移すなぎ、久しぶりだしな。ああ、『今回』はどうにか騎士の方々の目につかないことを祈る。無理だろうけど。

「行くぞー!!」

さてさて、そんじゃあ一つ。派手にいくとしようか。

色彩の天

「^{たんじょう}毯上の紺」」

一人の画家、ユナ・Ｌ・サルジェリアがそう宣告した。同時、彼女の魔法が発動する。

ユナオリジナルによる特別魔法。五才の頃に卒倒し、目を覚ました瞬間より生み出たこの世界における新たな魔法。名を、「ティ・クルウ——色彩の天」と呼ぶそうだ。

色を個別に分け、それぞれ役割の魔力を配分・任命する。

わかりやすく言えば、色によって役割が違うのだ。“瞬速の黄”となれば、ユナの魔力よって生み出された黄色の霧が彼女の足元を覆う。その速さたるや、とても人間とは思えぬスピードに匹敵する。“束縛の紫”となれば、同じく彼女の魔力によって生み出された紫色の蔓が標的を瞬く間に捕縛する。

かなり凄まじい魔法で、用途も様々。前世で言えば明らかに少年漫画の主人公が使ってそうな能力だ。ちよつと羨ましい。そして、今彼女が宣告した“毯上の紺”。用途は……

宙に浮く、紺色の絨毯を出現させる。

「乗って」

五人と一人の少年が紺色の絨毯に飛び乗る。それに繋がるように、出口付近にいた客が扉を勢いよく開く。差し込むは朝日の光。眩しく包み込んでくるそれは、時間が迫った今とこれからの十分の戦いを象徴する。

周りから激励の声が飛ぶ中、扉を開けた客から「行け！」と叫ばれる中、幼くも決意をもった少年が震える中、紺色の絨毯に乗った全員が想いを一つに。出陣する！

「ユナ！ 家の屋根沿いを伝って進めるか！？」

「もちろんだよ、アーちゃん。っていうかこの六人だとそれぐらいの高度が限界かなあー」

「よし、頼む」

扉を抜けた絨毯は、そのままジェットコースターさながらグリーンと斜め上に急上昇。家の壁を伝い、スピードを殺さず見事に屋根の上に昇る。道行く人からは、驚きの眼差しで見られるが、結構な人が俺たちを見た瞬間、大体同じような言葉をかけてくれた。

「おお、久しぶりに五人で動くのか！ 何するか知らんが頑張れよー！」

そう、俺たちは小さい頃からそれはもうやんちゃしていたのだ。公爵令嬢のアリスがいたこともあって、そこそこやば目のことをしても大丈夫。ゆえにそれはもう派手に子供の頃は騒いだ。今まで結構な数で騒ぎを起こしてきたが、歳を食うごとにその回数も減少……。けれど、こうしてまた五人が邂逅した瞬間、このようなことが起こってしまったのはもう――

「必然かと思ってしまうぜ」

「え！？ 何ですのアルトさん！？」

「いや、こつちの話だ」

「アルト！」

俺の名前を呼んだ名門騎士のお嬢、シェリーが視線を移動してい

く絨毯の後方へ向ける。

そして、その視線の先を見た六人全員がギョツとした。

「いやはや、我々としては予想大当たりといったところですかな」

黒と青の上着。右胸にはザヴェード軍の紋章が光る。動きやすい服装に軽やかな身のこなし。姿勢を前斜めに傾け、風の抵抗を可能な限り分散。

屋根の上を飛行していく紺色の絨毯の後方より、それは付いて来る……。一人一人自分の足で、俺たちのように何かに乗るわけでもなくそれはやって来る。ザヴェード軍特攻部隊。戦争がなくなったら今は主に国の治安を管轄していて、事件があればいち早く現場に駆けつける。その行動力の速さと俊敏な動きで逃亡を試みる犯罪者もすぐに御用。

俊足たるザヴェードの獣……“アキシロン”

通称――

「番犬部隊だと!？」

「アルト、すでに八人はいる! どうやら尾行されていたようだぞ!」

騎士モードのシェリーが自慢の眼力(身体能力は五人随一)で敵の数を確認。四人一組となって二つのチームとなって行動。一糸乱れぬ団結力で確実に俺たちに迫り来る。

早すぎだろ。くそっ、何だっぺんだ。慌てながら公爵令嬢ことアリスが大声で叫んだ。

「な、何故貴方たちがここにいますの!？」

「これはこれはシャーベット公爵家の長女殿。いえね、まあ改めて

言うまでもないのですがこの国では正当な目的がない魔法は原則禁止られておりまして。それを発動させてしまった以上我々としても動かざるをえないのですよ」

「にしても、にしてもですわ！ 行動が早すぎます！」

「…… 最初から張り込みされていたみたいだね、アーちゃん」

「え、誰をだ？」

「その貴族女にだよ」

え？ と呆けた表情でこちらを向くアリス。それに答えるように後ろからクツクツクと笑い声が聞こえる。そして確実に彼らは迫ってくる。…… ああ、まゝよくよく考えればわかるんだけどな。

「その通りだよ、天才画家。公爵令嬢が何事かと慌しく市民街へ走って行く姿が目撃されましたな。アリス様と市民街……。もはや『何かが起こる』のは確実。ゆえにこうして二部隊として配置させていただいたまでですて」

「――！」

唖然と、口をパクパクさせるアリス。

こりゃあ一本取られたといったところか。小さい頃より国の中で『やんちゃ』をしていた五人。そのやんちゃはいち子供の遊びではなく、度を越えた騒動であった。それを子供という特権を最大の武器にし、盛大に暴れまわったものだ。

しかも、公爵令嬢ことアリスに、名門騎士のシェリー、天才画家ユナ、炎術最高峰ファラの四人。罰を与えようにも中々難しい連中ばかり。しかも子供。ゆえにあの頃はザヴェード軍の治安部隊の方々と俺たちはことあるごとに激戦を繰り広げていた。

しかもそのほとんどが俺たちが『勝って』しまったため、相手側の面目もあつたものではない。

そのたび彼らは強化を重ね、訓練を積み、統率力を上げていった。そしてそれが見事ザヴェード王国治安の総合的上昇へと繋がっていくことになるとは……………。

いや、マジで。冗談かもしれないが結構マジなのだ。それほどあの頃の俺たちはやんちゃしていた。

今だって追って来る番犬どもを、あの頃はフアラがいつも爆撃していたものだった。懐かしい。

「もう番犬部隊は俺たちなんぞに構う必要ないと思うんですけどね！」

「おいおい、アルトくん。そんな悲しいことは言わないでくれたまえ。我々としても確かに国の治安を守る責務があるが、まあなあ……………。正直言つと、最近は暇だったのだよ」

「暇、というと？」

「いやはや、君たちのレベルがあまりにも高すぎるため、我々の方も自然とレベルが上がっていつてしまったんだよ。ゆえに最近犯罪者は皆齒ごたえがなくてねえ。全く面白くなかったんだ」

「……………」

おお、こいつ一体何を言っているんだ。そんな頭で大丈夫か。治安を守る者として、それはいいことじゃないか。

「ゆえにだよ、今日アリス令嬢が市民街に行ったという情報が入った時は胸躍ったよ。久しぶりに『やれる』と。やはり我々の訓練はこのためにあったのだから。このため、つまりは君たちと再戦し、見事、完膚なきまでに——」

「っげ」

「君らを倒し、我々の勝利を——！」

「暇すぎだろあんたら——！」

番犬部隊の二チームが左右より挟撃。それぞれ四人に別れ全員が空中へ飛び狙いを俺たちに定めた。

いやいやいや、やつぱこいつら暇すぎにもほどがあるんだろ！
さっさと警備戻れよ！

しかも以前より格段に統率力というか連携が上手くなってる。前はあれほどぴったりと全員一緒に動けなかったものだが……！ ちくしょう、俺たちの子供時代がやつらを強くさせてしまったというのか！

馬鹿すぎて泣ける！

「――“パンプキン”」

あぎゃああああああああああ

ドツカアン！ という盛大な衝撃音が鳴り、右から来た一チームが見事に全滅した。

否、スタンピングされた。ぺったんこ、と。

金髪の令嬢が生み出した、見るからに重そうで破壊力満点の、特大ビックナ……ハンマーによって。

「ツク！ やはり簡単にはいかんか！」

「ええ、そうよ。私のせいで見事に発生したこの失態。それを取り戻すには当然……」

バサリと、着ていたマントを翻す。この金髪女、マントがとつてもお気に入りなのだ。普通男が着けるもんだと突っ込みたいが今は我慢。まあ実際こいつの失態だしね。

とりあえずは、この場は彼女に任せよう。

「一人残らず、お仕置きですわ」

時間は残り七分。絨毯より一人抜け、目指すはそのまま北門である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859y/>

異世界でお医者さん目指します。

2011年12月2日18時50分発行